

松本清張記念館

◆館報◆

2010.8
第34号

神靈は皇室の聖なる象徴だ。

それが崩れるとなれば。



『神々の乱心』(上・下)
平成9年1月 文藝春秋

現在入手できる本
『神々の乱心』(上・下)
文春文庫

「神々の乱心」は、平成二年三月から平成四年五月まで、「週刊文春」に連載された。

目次

- 松本清張生誕100年記念講演
「戦後史の闇をこじ開ける」佐野眞一……………2
- 松本清張研究会 第22回研究発表会……………4
- 展示品紹介……………6
- 探検！ 清張記念館……………6
- 友の会活動報告……………7
- トピックス……………8

作品紹介

昭和八年十月、埼玉県特高課の吉屋謙介は、「月辰会研究所」から出てきた宮内省皇后宮職の下級女官・北村幸子を尋問した。宮中女官宛の「御霊示」の奉書に驚愕した吉屋は、「月辰会」を不敬な野心を持った新興宗教の教団と推理し、独自に調査を進める。

郷里の吉野で自殺した幸子の兄・友一は上京し、妹の仕えていた深町掌侍の弟・萩園泰之に会い、遺品の通行証を見せる。三日月と北斗七星とを抱き合わせた朱の紋章が入っていると、深町は思わず「げんさきのほしさま」と叫んだ。紋章と幸子が生前教団内で見たという「く」の字文様の、半月形の鏡からの連想で、泰之は教団が「大連阿片事件」と関係があり、その指導者は満洲に居たのではと睨む。

「月辰会」会長の秋元伍一はかつて関東軍の特務機関に所属し、「大連阿片事件」にも秘かに絡んでいた。事件発覚後、「新興宗教は鉄砲屋より儲かる」と聞き、満洲の新興宗教「道院」に目を付ける。江森静子の行う降霊による乱示の法に魅せられた秋元は、静子とともに失踪し、帰国して一人で新宗教を始めたのだ。

埼玉で相次いで起こる殺人事件を追う吉屋も、泰之の投書を機に大連阿片事件との関連に気付く。また、「月辰会」に潜入させた友一の報告で、元憲兵司令官をはじめ陸軍の将官らが、「神宝」(頭椎大刀)を拝観していることを知った泰之は、教団主の恐るべき野望に言葉をのむ。

(学芸担当 中川里志)



「戦後史の闇をこじ開ける」 佐野 眞一

松本清張記念館オリジナル映像

「日本の黒い霧—遙かな照射」上映と講演の夕べ

●日時 平成22年2月26日(金)

●場所 東京新宿明治安田生命ホール

清張生誕100年の最後を飾るイベントとして、当館オリジナル映像「日本の黒い霧—遙かな照射」の東京上映会と、ノンフィクション作家佐野眞一さんの講演会を、株式会社文藝春秋の協賛により開催しました。上映に続いて行われた講演は、清張の現代史に触れながらのもので、会場を埋めた三百人の聴衆は熱心に耳を傾け、メモを取る姿も多く見られました。

今日二月二十六日は、妻の誕生日でもあるんですが、七十四年前に帝都を震撼させた大事件「二・二六事件」が起きた日です。この事件から日本は大きな角を曲がり、戦争に突入していくと言っても過言ではありません。

先程の映像で主に取り上げられたのは、オキユパイドジャパン、戦後の米軍占領下で日本で起きた大きな事件で、清張は「日本の黒い霧」で取り上げています。それからしばらくして書いた「昭和史発掘」は、後半はすべてこの「二・二六事件」に費やされています。僕がノンフィクション作家になった大きな理由の一つが、この「二・二六事件」を読んだことです。読まれた方も多いと思いますが、僕はこの記述を通じて「歴史を

肉体化して書くとはこういうことだ」と殴るように教わった気がします。

具体的にいきますと、青年将校が宮中皇居の占拠、天皇を錦の御旗に担ぎ出そうという大変無謀な計画で宮中に侵入します。その計画実行に及んで、皇居からお濠を隔てた桜田門の警視庁にいる仲間、叛乱将校に手旗信号を送ろうと思っても、非常な心理的な高いハードルがあり怖じ気ついてしまふ、そういううちに憲兵に取り押さえられてしまふ……という有名なシーンがあります。これを読んだとき「なんという凄い表現だ、事件の本質をたつたこれだけで言い当てている」と思いました。「歴史を書く、現代史を書くとはこういうことなんだ」と、つくづく感じさせられたものです。

「昭和史発掘」や、いま映像で詳細に描かれた「日本の黒い霧」で、僕は尊敬する民俗学者の宮本常一の晩年の言葉「記録されたものしか記憶されない」を思い出します。つまり、記録とは本当に重要な行為であつて、記録しない限りこの世に存在しないことになるんだと。清張さんの膨大な作品群の根底に流れているのはこの記録

する精神だったのでないでしょうか。ノンフィクションというか記録文学とも言えますね。

もう一つ僕が共感するのは、歴史学者のE・H・カーという人が「歴史とは何か」と尋ねられた時に答えた言葉です。「現代の光を過去に当て、過去の光で現代を見ることだ」と。ちよつと禅問答みたいですが、大変深々とした言葉です。今日の映像で、帝銀事件あるいは下山事件、松川事件、「黒地の絵」に描かれた小倉の黒人兵脱走事件を見て、米軍の占領下の日本とというのは決して過去のものではなく、沖繩



「昭和史発掘」挿画より(風間完画)



の普天間基地、キャンプシユワブの問題といい、日本の米軍支配あるいは米軍占領の形式は、戦後六十年以上経っても本質的には変わっていない。カーの言葉に通じていると僕は思います。

オキユバイドジャンで起きた怪事件を扱った「日本の黒い霧」は昭和三十五年の安保闘争の年に出ました。僕は中学二年生で、読んで大変衝撃を受けました。

サンフランシスコ講和条約からわずか八年、日本が独立国家になって八年という、まだまだなまなましい状況の中で、大きな犯罪謀略の真犯人が、どうやらGHQ内部のG2とGSの対立構造にあるらしいと読み解いていく作業をしたわけです。

先程の映像でかなり詳細に描かれましたが、たとえば帝銀事件の平沢貞通は逮捕されますが、その後には戦時中の七三一部隊・石井部隊の人間達関わっている」と大胆な推理している。七三一部隊の生き残りの内藤という人間が、戦後の日本の血液行政のキーマンとして作り上



げたミドリ十字は、葉害エイズの問題を引き起こしました。このように今も同じような問題を引き起こしているところに、「現代の光を当て、過去の光で現代を見る」という往復運動がある。松本清張という人は、この歴史眼は絶対に手放さなかつた。

また、あの時代にあつて粘り強い取材をし、「GHQ内部に逆コースをさせよう」というグループがいた」ことを発表するのは大変な勇気だったと思います。最近の調査では清張さんの史観に異を唱える意見もありますが、あの時代に松本清張がそういう視点を持ち、米軍の存在の大きさを指摘したという功績は、全く減じるものではないと思います。いまだに謎が多数ありますが、そういうことをあぶりだしただけでも、清張の衝撃力の大きさ、歴史観の大胆さ、あるいは透徹した眼力を感じます。

清張の遺作となったのは「神々の乱心」という作品です。これは昭和初期の宮中に月辰会という新興宗教がはびこっていることを軸に書かれています。この月辰会の裏側には満州や阿片政策があり非常に膨大な構想力で書かれています。清張は具体的には昭和天皇やその母で、大正天皇のお后である貞明皇后(皇太后)の名前を出していませんが、いささか近代天皇制や大正、昭和史に興味のある方ならばこの物語の背景には、彼らのみえざる確執がテーマになっていることはすぐお分かりでしょう。

僕は今から四年前「枢密院議長の日記」という本を出しました。倉富勇三郎という枢密院議長の膨大なしかも読みにくい字の日記を解読したものです。なかに貞明皇后が昭和天皇に対して「神を信ぜざれば必ず神罰があたるべし」という極めて重要な記述があり、驚きました。貞明皇太后が元老の西園寺公望に語った言葉を、倉富が西園寺から聞き記録したものです。なぜ貞明皇太后は自分の長男をそこまで烈しく罵ったか。

大正天皇はご存知の通り病身で、牧野伸顕を中心に重臣は昭和天皇を摂政にしますが、昭和天皇はヨーロッパ的な習慣を皇室に持ち込みます。皇太后には、自分の子である昭和天皇は、自分の夫をないがしろにし外遊に精を出しているようにみえる。外遊中に一衣帯水のロシアでことがおきたり、攻められたりしたらいいこの日本はどうなるんだ、日本の天皇制は消滅してしまうのではという恐怖に襲われてもおかしくなかったと思います。

松本清張も作家の想像力で感じていたのでしょう。貞明皇太后に忍び寄る新興勢力を描くことで、天皇制あるいは皇室の本質的な危機を透視していったんだと思います。

二・二六事件では、昭和天皇の弟の秩父宮が弘前から出てきて貞明皇太后とかなり長い時間会っています。ふたりがどういふ話をしていたかはわかりませんが、極めて重要な話をしたでしょう。こうしたこと

が清張の頭の中で酵母菌となり、「兄弟の確執が、青年将校達が秩父宮を押し立てて宮廷革命になりかけた」となったのではと思っんです。僕たちは今でこそ皇室の情報をよく知っていますが、当時はそれほどではありません。清張の資料を読む力も大変なものです。清張の想像力、作家の歴史観に裏打ちされた想像力はここまで及ぶものかと、驚嘆したことを生々しく記憶しています。

佐野 眞一

1947(昭和22)年、東京に生まれる。早稲田大学文学部卒業後、出版社勤務を経てノンフィクション作家に。「戦後」と「現代」を映し出す意欲的なテーマに挑み続けている。97年、「旅する巨人 宮本常一と渋沢敬三」で第28回大宅壮一ノンフィクション賞を受賞。著書に「巨怪伝」「カリスマ」「東電OL殺人事件」「枢密院議長の日記」などがある。昨年、「甘粕正彦 乱心の曠野」で第31回講談社ノンフィクション賞を受賞。また、東京新聞で「編集者の見た松本清張」を連載した。(平成22年2月26日現在)



松本清張研究会 第22回 研究発表会

平成22年6月5日(土) 午後2時

立教大学

今回は、現在記念館で開催中の企画展『松本清張 最後の小説 神々の乱心』にちなみ、原武史先生にご講演をお願いしました。七十名の会員や清張ファンの参加があり、長時間にもかかわらず皆さん熱心に聴講されていました。

「神々の乱心」との衝撃の出会い

十年前に「神々の乱心」を初めて読んだとき、非常に強い衝撃を受けました。私が『大正天皇』を書き上げたときです。

天皇研究を始めたのは、日本経済新聞で宮内庁詰めの記事となり、昭和天皇のXデーが近づきつつある時期に、初めてお濠の内側をかいま見た体験がきっかけでした。平成元年に東大の大学院に入ってから、国学とか神道の研究を始めました。「復古神道における〈出雲〉」を取めた『出雲という思想』(講談社学術文庫)という本

に「埼玉の謎」という小論文を収録しています。埼玉の県庁所在地はなぜ大宮ではなく、浦和なのか。裏に、氷川神社の存在があるのではないか。江戸が東京になり天皇がくると、東京はアマテラスの都になっていく。ところが、武蔵国にはスサノヲという対立する神を祀る氷川神社がたくさんある。実はその中心は「大きな宮」、氷川神社を指す「大宮」であった。そんなことを考察したわけです。

話は戻りますが、「神々の乱心」を読んだとき、のつけからびんぶん来たわけです。最初にいきなり「梅広」が出てくる。東武東上線の沿線に「梅広」という架空の町がある。今の東松山、昔でいえば、武州松山。なぜ「梅広」か。大本神論「初発の神論」です。『三ぜん世界一度に開く梅の花、良の金神の世に成りたぞよ』有名な出口ナオの筆先です。大本教がらみの梅が付く地名に教祖が惹かれ、月辰会研究所を置くわけです。さらにいうと、今の東松山がある荒川の支

流域には、氷川神社が大変多い。つまり、「梅広」は氷川祭祀圏に属しているわけです。

しかも、教祖は満洲で「ツクヨミ」という神に着眼しています。アマテラス、ツクヨミ、スサノヲの三柱の神は、イザナキから生まれた。しかしそのあと、ツクヨミはほとんど出てこない。活躍するのはアマテラスとその弟であるスサノヲだけ。大本教はこのスサノヲを前面に出したため弾圧された。動かないツクヨミであれば、弾圧の心配はないだろう、とツクヨミを思いつく。その教祖の名前が平田有信です。

何で「平田」か。平田篤胤なのです。ここで「平田篤胤」がきたかと、私はびっくりした。篤胤は、大胆にツクヨミとスサノヲは実は同じなんだと言う。篤胤が『霊能真柱』(たまのみはしら)の中でスサノヲとツクヨミがイコールであると言っていることと、武蔵国にスサノヲを祀る氷川神社がたくさんあるということが、自分の頭の中でブックキングしたのです。最初の数頁を読んだところで、武蔵国に祀られている神、スサノヲとツクヨミと、平田の教団が武蔵国の梅広に東松山に本部を置くという図式が、私の中で出来上がって、これはすごい小説に違いないぞという予感が走ったわけです。

小説の中に埋めこまれた暗号を 解説する面白さ

冒頭、「東武鉄道東上線は、東京市池袋から出て埼玉県川越市を経て、秩父に近い寄居町にいたっていた」とある。秩父に繋がっている。実は

ここにも、重要なメッセージが発せられている。「秩父宮」のメタファーなわけです。東上線沿線に本部を置いたことは、深読みをすれば、「秩父宮」に繋がる。実は月辰会は、昭和天皇の代わりに秩父宮を皇位に据えようとする野望を持っていて、一番最初の頁にその野望もちゃんと出ているわけです。

清張さんの小説はいろんな暗号が組み込まれていて、十回ぐらい読み返して、ああつといるところが結構ある。『松本清張の「遺言」』(文春新書)を書いたあと、実は、最新の『松本清張研究』で文芸評論家の福田和也さんと対談した。福田さんは作品に批判的でしたが、私はむしろ、埋めこまれたメッセージ、暗号を解説していく面白さに非常に惹かれた。また平成になって、自分の死、タイムリミットを意識しつつ、それとの闘いの中で、最後にこれだけのものを残した、そこに限りなく惹かれたのです。

『松本清張研究』には、東大の教授で文芸評論家の小森陽一さんが面白いことを書かれています。埼玉の梅広で、特高課の刑事が月辰会研究所から出てきた女を尋問する。この北村幸子が必死に取られまいとしたものには、月と北斗七星の紋があつて「御霊示」と書いてある。深町女官殿との宛名もある。結局最後まで分からないがその内容について、小森さんは非常に面白い推測をしているのです。物語は昭和八年の十月ごろのことです。同じ年の、十二月二十三日に現天皇が生まれている。その直前に当たることから推測すると、それは今度生まれてくる子供が男か女かを示す「御霊示」なんだと言うわけです。私もああつ、なるほどと思ひ、素直に小森さんの着眼点に脱帽した。

小森さんはさらに、「御霊示」には「子供は男だ」と書かれてあつたんだと言うのです。とすれば、実は大変重大なことになる。これまで昭和天皇と香淳皇后のあいだに生まれた子供は、みんな女だった。このままだと、黙っていても弟・秩父宮に皇位がいく。月辰会はそれを期待していたが、『男だ』という「御霊示」が出た。こうなる

と、秩父宮を皇位につけるには、より積極的な行動に出る必要がある。結局、偽の三種の神器を作り、その秘密を知る人間をほとんど殺していった。もし「子供は女だ」だったら、あのように急激に行動を起こしたか、と想像が膨らむわけです。

お濠の内側

下巻の最初のところに、昭和天皇の誕生を祝う午餐会のメニューが、日清戦争の戦利品を納めた建物、振天府にぶら下がっていたという謎の事件が発生します。その発見の仕方とも具体的に、見てきたような描き方です。広大な皇居という禁域の内側には、研究者でも及ばない、資料だけでは追えない対象がそこあるのです。松本清張は相当地に取材もされて、それを非常にリアルに描いている。

昭和天皇とか秩父宮とか貞明皇后とか、宮中の重要人物が本当はいるのですが、「神々の乱心」を読んでも具体的に描いて出てこない。例えば、下巻に、魘魅という呪いをかけるシーンがある。その呪いが、皇孫に向けられていると知ったときに、探偵役の萩園泰之が恐れ多いと凍りつくわけです。その皇孫は昭和天皇です。秩父宮が貞明皇后に非常に可愛がれていたという話もちらつと出てくる。実はそういうものが、影の主役として重要な役割を果たしている。その裏には、清張の「昭和史発掘」以来の研究の膨大な蓄積がある。例えば、昭和天皇と貞明皇后の確執という問題は、私も岩波新書の『昭和天皇』で描きました。それよりはるか前、「昭和史発掘」(二・二六事件)の時点で清張は気づいていたのです。島津ハルという元

女官長が神がかつて「天皇陛下は(中略)早晚御崩御は免れず」とか「国体明徴の道を立つるには、高松宮殿下を擁立しなければならぬ」なんて口



走る不敬事件や、矢野祐太郎の神政龍神会事件。二・二六事件と同じ昭和十一年に起こったこれらの事件についても、清張はすでに「昭和史発掘」の中で触れているわけです。

「女官を描くこと」で宮中を描く

女官に関しては、最近、静岡福祉大学の小田部雄次先生や高橋紘先生などが精力的に研究されていますが、その前の段階で、松本清張は女官という存在に着目していた。これもまたすごく鋭いと思う。女官を描くことによって宮中を描くという方法は、小説の方法として優れていると思います。

女官制度の改革に昭和天皇は皇太子の時、意欲を燃やしていました。大正時代の宮中はまだ事実上、胤を絶やさなための一夫多妻制を維持していた。これに対して改革の大鉦を振るおうとしたわけです。女官の数を減らす。住み込みを通勤制に改める。既婚者も可とし、源氏名は廃止する。対して、貞明皇后が立ちほだかた。宮中祭祀を行う際に住み込みの女官がいなくて円滑にできない。おまえは宮中祭祀を軽視するのか。だいたい正座もできないくせに何を言うか。とたしなめられた。「神々の乱心」には、女官制度をめぐる両者の対立が非常によく描かれている。

「神々の乱心」では、宮殿の背後に紅葉山と言われる所があつて、膨大な女官部屋に女官が住み込んでいるという設定になっている。昭和初期の宮殿は明治宮殿で今と全然違うので、皇居

の構造やどこに何があるかといった知識も必要なわけです。鏡も何種類も出てくる。根底に清張の古代史研究があるわけだが、鏡も複雑で知識がいる。三種の神器の一つ、八咫鏡は実は内行花文鏡だろうと語らせています。下巻で、満洲出土の多鈕細文鏡が出てくる。これが二つに割れている。平田有信がその一つを日本に持って帰って、月辰会本部の地下の聖暦の間に飾る。その空間を支配しているのは、事実上の妻、江森静子、斎王台の方なのです。神がかかるのは平田有信ではなく、斎王台、女性の方なのです。本場の代表は実は静子、つまり女性の方です。シャーマンは女性で、「御霊示」を発する

のもおそろしく静子の方、男性の平田がこれを解釈する。男は解釈するだけ。ここに、天皇制を考える上での重大なヒントが隠されているのではないか。そこにこの小説の深さがあり、もつと言えば、松本清張という人の思想的な深さがある。そこにメスを入れないことには、この小説の本当の意味は分からない。

貞明皇后という存在

大正から昭和初期にかけての宮中を見ていくと、女性であり大正天皇の妻であり昭和天皇の母親である貞明皇后の存在感は、大変なものがあった。その貞明皇后に、昭和天皇は非常に畏れの感情を抱いていたのではないかという気がする。

大正天皇は皇太子時代ばかりか、天皇になつても、プライベートを優先して葉山や日光で、

ヨットに乗ったり馬に乗ったりしている。実は貞明皇后も付き添っていた。大正天皇がおかしくなったとき、どうして天皇を諫めなかったのか、と皇后は自分を責めた。宮中祭祀を怠ったが故に、神罰が当たったのではないか。

ですから、大正天皇の病気が悪化するとともに、貞明皇后の態度は一変します。必死になつて祈る。宮中で、あるいは九州まで行って祈る。特に福岡の香椎宮の祭神は仲哀天皇と神功皇后です。この神功皇后に貞明皇后は惹かれ、自らを重ね合わせていく。仲哀天皇も神の教えを守らなかつたために突然死んでいるからです。神功皇后は天皇の意志を継いで三韓征伐を行う。貞明皇后も太平洋戦争のとき、昭和二十年の段階でまだ勝ちを信じていた。自分が神功皇后なら負けるわけがない。こういう神がかつた態度が、昭和天皇に影響を与えたのではないかと、というのが私の読みです。

昭和五年になると、信濃町の駅の近くに大宮御所が完成します。女官もみんな引越してくる。ここで、昭和天皇・香淳皇后に付いている皇居派の女官と、大宮派といわれる皇太后に付いている女官に、二つに割れるわけです。大宮派は旧態依然、住み込みが前提で、世間知らずの人たちが皇太后の周りを囲んでいる。宮中と一口に言うが、昭和初期は完全に二つに割れていて、皇太后が隠然たる力を持っている。これが、昭和史を考える上で非常に大きいのではないかと私は思います。「神々の乱心」でも、女官の間に漂っている不穏な空気を非常によく描いている。


戦前で終わらない物語

私は「松本清張の『遺言』」の最後に、未完の小説のラストがどうなるか、想像で三通りのパターンを示しました。関心のある方はお読み下さい。「神々の乱心」は二・二六事件の前、薄儀が来日する昭和十年で終わっていますが、扱われている問題が戦前で終わったのかというと、決してそんなことはないのです。例えば、入江相

政という人がいます。昭和六十年に侍従長を退任するまで、五十年間宮中に仕えて、「入江相政日記」を残しています。実はこの「日記」を清張は読んでいて、「神々の乱心」が戦後にも繋がっていると感じていたのではないかと、というのが、私の読みです。

どういふことかというところ、「日記」を読むと「魔女」といわれる女官が出てくるのです。香淳皇后の代拝もしたことがある高等女官で、今城誼子と言います。昔、相当貞明皇后に可愛がられた女官ですが、昭和四十年の後半まで宮中にいたわけです。昭和四十一、二年頃、入江は六十代後半に入つた昭和天皇の体調・健康に配慮して、肉体的負担が重い祭祀を減らそうと考えるわけですが、ところが、「魔女」こと今城女官は真つ向から反対するのです。祭祀を軽んじ神を疎かにすると、貞明皇后が言ったように神罰が当たる。相当に激しい対立があつたことが、この時期の「入江相政日記」を読むと分かるわけです。

この「魔女」が当時出入りしていた教団があります。「真の道」という教団らしい。「神々の乱心」に影響を与えた教団は、神政龍神会や大本教だけではないというのが私の読みです。「真の道」がそれではないか。資料を読んでびっくりしたのですが、「真の道」は「神々の乱心」に出てくる、乱示というあの独特の儀式を取り入れているのです。実は、教祖は満洲に行つて道院から学びその影響を受けている。乱示を行う「真の道」に今城女官が入り込んでいたとすると、「神々の乱心」の話と非常に似通ってくるわけです。ですから、もし清張が「入江相政日記」を読んでいて、戦後も射程に入れていたとすれば、よりスケールの大きな小説として読めるわけです。



講師 原 武史

○明治学院大学教授
○専攻 日本政治思想史

早稲田大学政治経済学部卒業。日本経済新聞社東京社会部記者として、昭和天皇の病状報道に従事。「大正天皇」で第55回毎日出版文化賞。「滝山コミューン一九七四」で第30回講談社ノンフィクション賞。「昭和天皇」で第12回司馬遼太郎賞を受賞。著書に「松本清張の『遺言』——『神々の乱心』を読み解く」「文春新書、二〇〇九」がある。

「清張と宮中」——『神々の乱心』の謎を解く

研究発表

「点と線」再読の試み——『社会派』からの逸脱

発表者 栗田卓氏（立教大学大学院）

展示品紹介



芥川賞正賞の懐中時計

皆さんは、芥川賞の正賞が、賞金ではなく「懐中時計」のほうだということをご存知だろうか。松本清張記念館に展示している「芥川賞目録」は次のようになっている。

記	
一賞	時計
一副賞	金五萬圓也
第二十八回芥川龍之介賞	
トシテ 右ノ通り 贈呈	
シマス	
昭和二十八年二月二十日	
松本清張君	
日本文学振興會	

賞金の「金五萬圓也」は、当時、大卒事務の初任給が約九二〇〇円というから、給料の三〜五ヶ月分くらいといったところか。現在でも正賞が懐中時計、副賞がお金だが、金額は一〇〇万円。およそ同じくらいの価値ではないかと思われる。



※授賞は年一回で、上半期(十二月一日〜五月三十一日)までに公表されたもの。選考会は七月中旬、贈呈式は八月中旬と、下半期(六月一日〜十月三十一日)までに公表されたもの。選考会は翌年一月中旬、贈呈式は同二月中旬がある。

(学芸員 柳原 暁子)

芥川賞について補足しておく、正式名称は目録にもあるように「芥川龍之介賞」。公益法人日本文学振興会から贈られる。作家であり「文藝春秋」を創刊し出版社を創立した菊池寛が、芥川龍之介の名を記念して、直木(三十五)賞と同時に昭和十年に制定した。

よく、両賞の違いを訊かれる。各賞紹介によると、芥川賞は「各新聞・雑誌(同人雑誌を含む)に発表された純文学短編作品中最も優秀なるものに呈する賞(応募方式ではない)。主に無名もしくは新進作家が対象となる」。直木賞は「各新聞・雑誌(同人雑誌を含む)あるいは単行本として発表された短編および長編の大衆文芸作品中最も優秀なるものに呈する賞(応募方式ではない)。無名・新進・中堅作家が対象となる」とある*。

清張は、「西郷札」が直木賞候補、「或る『小倉日記』伝」も直木賞候補から芥川賞へ回付され受賞したという経緯を持つている。受賞後の幅広い活躍を考えると、賞についての興味はさらに深まるというものだ。

老よしとハルコの探検! 清張記念館

館外 “清張通り”の巻

きよし 記念館の前の道に「清張通り」の愛称がついたね。道路標識もできてる。

ハルコ 4年前には、命名を熱望する地元自治会を中心に2千人を超える署名が集まったんですって。すごい!

きよし 小倉のまちでは鷗外に続く、人名を冠した通りになるね。鷗外の存在を終生追い続けた清張は、鷗外と並び称されることになって、今頃あの世でどんな気持ちでいるだろう。



「清張通り」沿いの「清張記念館」。アクセスもいっそう分かりやすくなったね。



ハルコ 全国でも、作家の名前のついた通りにその作家の文学館が建っていることはあるみたい。それ以上に、その人が地元にとどのくらい愛されているかのバロメータとも言えるわね。

ちなみに清張と同じ年の太宰治「通り」は東京と青森の2箇所にあるんですって。

きよし ま、負けられないっ…。また署名集めなきゃ!

JR西小倉駅前から南北約1.8kmの通りには清張の母校・板櫃尋常高等小学校(現・清水小学校)も近接。シンボルツリーのけやき並木が年を経て、大木へと育つ姿に、文化薫る街の醸成を重ね合わせています。記念館ともどもよろしくお願ひします。

■ 瀬戸内文学館連絡協議会学芸員・担当者研修会

■ 3月12日(金) ■ 記念館会議室

協議会加盟の文学館15館のうち8館15名の学芸員が参加して、平成21年度の研修会が開催されました。「文化財総合管理の手法」の研修と「松本清張生誕100年記念巡回展」の報告の後、意見交換を行いました。



■ 企画展「神々の乱心」記念講演会

■ 3月21日(日) ■ 小倉リーセントホテル
■ 講師 原武史(明治学院大学教授)

原武史さんを小倉にお招きし、「清張と宮中―『神々の乱心』の謎を解く」というテーマで講演していただきました。

120名の方が聴講し、皆さん熱心にメモを取ってられました。



■ 「清張通り」愛称命名記念式典

■ 5月24日(月)
■ 記念館企画展示室前ホール

関係者40名が出席して、「清張通り」の命名を記念した式典が開かれました。

松本清張夫人ナヲ様から「街づくりに役立てば、清張も喜んでくれていると思います」とのメッセージが寄せられました。



■ 『終わりなき探求』

松本清張記念館開館10年＋
松本清張生誕100年記念誌

平成20年に受賞した菊池寛賞副賞により記念誌を制作しました。

内容は、平成10年の開館から生誕100年を迎えた平成21年度までの記念館の活動・事業を紹介したものです。

この記念誌は、松本清張記念館友の会会員や松本清張研究会会員の他、全国の文学館や図書館などに配布しました。

また、記念館読書室で読むことができます。



友の会 活動報告

● 朗読劇「渡された場面」 4月17日(土) 参加者 94名

劇団前進座による朗読劇は、今回で7回目、演目は「渡された場面」でした。小倉城の石垣をバックに、毎回新たな作品に挑戦してきた朗読劇は、会員だけでなく一般の方々にも高い評価を得ました。

生誕100年記念事業後の新たなスタートとして、ふさわしいものとなりました。



● 文学散歩 6月25日(金) 参加者 34名

清張さんに縁のある地を訪ねる文学散歩。

今回は、まだ作家になる前、よく訪れたとされる耶馬溪や映画「張込み」のロケで知られる宝泉寺温泉、さらに「日本のアンデルセン」といわれる久留島武彦の記念館を訪ねました。横浜や名古屋といった遠方からの参加もあり、今後更に魅力ある文学散歩にしていきたいと考えています。



● 友の会会員 更新のお知らせと新規会員募集 ●

松本清張記念館友の会は8月1日から翌年7月31日までを一年度として取り扱っています。

今年度も引き続き更新いただきますようお願いいたします。

また、新規会員も募集中です！ 友の会では清張ゆかりの地の見学、読書会・講演会の開催、会報の発行など多彩な事業を展開しています。会費は1年間で3,000円です。

友の会入会のお申し込みは… TEL. 093-582-2761 松本清張記念館友の会事務局まで

平成 22 年度

中学生・高校生

読書感想文
コンクール

清張作品の読書感想文を、中学生・高校生を対象に募集します。

若年層に、より多くの作品に親しんで欲しい、表現力を学び豊かな心を身に付けてもらいたいという願いから、このコンクールは始まりました。そして、これからの担う若者たちに、探求の人・松本清張の精神を伝えていくことができれば幸いです。

■応募対象 全国の中学生・高校生

■課題図書 中学生・高校生ともに下記から1作品

【点と線】(『長篇ミステリー傑作選 点と線』文春文庫※決定稿 など)

【遭難】(『黒い画集』新潮文庫、『松本清張映画化作品集3 遭難』双葉文庫)

【特技】(『松本清張短編全集2 青のある断層』光文社文庫、同 カッパノベルズ)

■応募方法

- 中学生、高校生ともに1200～2000字程度の読書感想文を書き、応募用紙に添えて提出してください。
- 手書き、ワープロどちらでも結構です。ただし、全体の字数が分かるように応募用紙に1行の字数×行数を記入してください。
- 原稿は自作で未発表のものに限ります。なお、応募原稿はお返しいたしませんので、必要な人はコピーをおとりください。

■応募締切 平成22年10月31日(日) ※消印有効

■応募先 〒803-0813 福岡県北九州市小倉北区内2番3号
松本清張記念館 感想文コンクール係
※応募用紙は記念館HPからダウンロードできます。

■選考 松本清張記念館内の選考委員会により選考します。

■発表

審査結果は、12月下旬頃、本人と学校に通知します。
最優秀賞、優秀賞の受賞者には、表彰式を行います。
なお、入選の結果や受賞作品を記念館刊行物等に掲載することがあります。その場合、著作権は松本清張記念館に帰属します。

■賞品 (受賞人数等、変更の場合もあります。)

- 最優秀賞(1人)
《モンブラン》万年筆「マイスターシュテックNo.149」
 - 優秀賞(中学の部…1人)(高校の部…1人) 文具など(未定)
 - 佳作(中学の部…3人)(高校の部…3人)
記念館グッズと図書カード
- ※なお、最優秀賞は中学の部、高校の部で各一回ずつの受賞と限らせていただきます。最優秀賞受賞後の応募も歓迎します。すでに受賞した人からの応募作品が賞に該当する場合は「特別賞」として「報館」掲載を予定しています。

- 主催 北九州市教育委員会
- 主管 北九州市立松本清張記念館
- 協力 モンブランジャパン



イラスト:山藤 章二

編集・発行

松本清張記念館

〒803-0813
北九州市小倉北区内2番3号
TEL 093 (582) 2761
FAX 093 (562) 2303
http://www.kid.ne.jp/seicho
制作 (株)エディックス

- 開館時間 午前9:30～午後6:00 (入館は午後5:30まで)
- 休館日 年末(12月29日～12月31日)
- 観覧料 一般/500円(400円) 中・高生/300円(240円)
小学生/200円(160円) ()は30人以上の団体
- アクセス JR: 小倉駅から徒歩15分 西小倉駅から徒歩5分
小倉駅からは100円バスをご利用いただく(小倉城・松本清張記念館前下車)
車: 北九州市都立高速、大手町ランプより5分

松本清張記念館

第12回

松本清張研究奨励事業
入選企画決定

平成10年度に創設した「松本清張研究奨励事業」も12回目を迎えました。今回は、松本清張の幅広い活動に対して、文学研究、古代史・現代史研究、人物研究など多彩な研究企画案の応募が17点ありました。

選考委員会による厳正な審査の結果、次のとおり入選者が決まりました。

企画名 清張古代学
——『魏志』倭人伝から『魏志』東夷伝の考古学へ
入選者 東 潮 (徳島大学大学院教授)
奨励金 75万円

企画名 松本清張と近代の巫女たち
——『神々の乱心』にみる「御神鏡」の研究
入選者 美馬 弘 (共同研究代表・多摩美術大学特別研究員)
奨励金 50万円

第13回

松本清張研究奨励事業募集

募集要項

対象 ①松本清張の作品や人物を研究する活動
②松本清張の精神を継承する創造的かつ斬新な活動(調査、研究等)
※上記①②の活動で、これから行おうとするもの。ジャンル、年齢・性別・国籍は問いません。ただし、未発表に限ります。個人又は団体も可。

内容 入選者(団体)に200万円を上限とする研究奨励金を支給します。

応募方法 今後取り組みたい調査・研究テーマ等の内容が具体的に分かる企画書、予算書、参考資料(様式は自由、ただし日本語)を、平成23年3月31日までに応募してください。

※詳しくは記念館までお問い合わせください。

●編集後記●

今年2月に東京で開催した「『日本の黒い霧一遙かな照射』上映と講演の夕べ」。前号ではその概要を載せました。今号は、この時の佐野真一さんの講演の内容を詳しく掲載しております。

今年の8月4日で記念館は開館12周年を迎えます。記念講演会には佐野さんをお招きし、「戦後出版ジャーナリズムを駆け抜けた巨人・松本清張」と題して講演していただきます。どういってお話をされるか楽しみです。

(西本 衛)

